

「触れて」楽しむ活動の充実に向けて

大淀川学習館
主任技師 園田 恵子

【要 約】

本研究では、大淀川学習館（以下、当館とする）の運営コンセプトの一部である「ふれて、たのしむ」ことの更なる充実に向け、定期的な触れあい体験の場を作ることをテーマとした。従来の「ミニ講座」を見直し、生き物との触れあいを中心にした講座を実施することにより研究を行い、来館者に生き物に触れて楽しむ機会を提供することができた。また、アンケート結果からニーズの高さを再確認し、継続的な取り組みにつなげることができた。

はじめに

当館は、各展示室において大淀川周辺の生き物を展示し、「みて、ふれて、たのしむ」をコンセプトに運営している施設である。展示する生き物は季節ごとに替え、時には標本やはく製を用いた展示にするなど、工夫を凝らしている。

しかし、常設展示および企画展ともに、生き物の多くが展示ケースや水槽に入れられ、来館者は触れることなく観察し、生き物についての情報はキャプションから得るスタイルとなっている。また、コロナ禍により不定期で実施していた「ミニ講座」も中止となり、来館者が職員から直接生き物の話を聞いたり、生き物に触れたりする機会が以前にも増してなくなってしまった状況である。これらの現状を踏まえると、当館には「みて、ふれて、たのしむ」のコンセプトの「ふれる」部分が不足していることは否めない。

そこで、本研究では、従来の「ミニ講座」のあり方を再検討し、新たに生き物と触れあうことができる場を作ることで、「ふれて、たのしむ」という理念の達成に近づけるとともに、来館者が実際に生き物に触れて楽しむ機会を得て、満足度を高めてもらうことを目的とした実践を行った。

第1章 「触れる」体験活動の計画

第1節 現状と課題

当館で「ふれる」体験ができるイベントは、「いきものとのふれあい&よみきかせ」と「ミニ講座」の2つがある。

平日開催の「いきものとのふれあい&よみきかせ」では、読み聞かせの後に、絵本に出てきた生き物との触れあいをしている。しかし、乳幼児とその保護者向けであり、対象が限られている。一方、「ミ

ミニ講座」はコロナ禍で、令和元年度末から実質中止となっているが、土日祝日を中心に一回15分程度の講座を不定期で実施している。主として技師2名が、各展示室の生き物の前で、生き物の解説をしているが、実施時間や内容、場所も明確に決まっておらず、時間があれば実施する、というものである。生き物の話が主で、参加者の出入りもあり、触れる機会の提供は難しくなっている。

現状では、来館者は「みて」楽しむことはできても、「ふれて」楽しむことや学ぶことは難しい。したがって、コロナ禍か否かに関わらず、継続できる体制を整えて、触れる機会の提供を増やし、来館者の満足度を高めることが課題である。

第2節 活動の設定と準備

活動を設定するにあたり、従来の「ミニ講座」を基本に据え、内容や実施方法を見直すことにした。以下の(1)～(3)の項目を検討後、令和4年6月に当館の全職員へ提案し、新規の体験型「ミニ講座」として立ち上げ直した。名称は『身近な生き物ちょこっと体験』とした。

(1) 目的

目的として、大きく3つのことを掲げることにした。

- ①五感を使った「ふれる」体験の提供
- ②生き物について楽しく学ぶ
- ③バックヤードの生き物の利用促進

(2) 実施方法

- 実施日：夏季休業期間中（7日間）、
通常の日曜日（1日間）、秋季休業期間中（2日間）
- 時間：11：00～11：30、14：30～15：00（一日2回）
- 定員：各回先着5組（どなたでも可）
- 場所：学習室または企画展示室



写真1 入口前に設置した看板

(3) 広報

Facebook（以下、FBとする）とインスタグラムを事前の広報として利用し、2日前までに記事をあげることとした。また、当日は5分前の放送と受付等への看板の設置（写真1）をすることとした。

第2章 「触れる」体験活動の実施

『身近な生き物ちょこっと体験』は、研究者本人が実施者となり、全10日間（20回）を実施した。全体で94組、324名の参加があった。

第1節 活動の実際

7/23(土)	ナナフシ/ニホンヒキガエル
7/26(火)	チョウの幼虫/ニホンヒキガエル
8/6(土)	カブトムシ/チョウの幼虫
8/11(木・祝)	ナナフシ/カブトムシ
8/13(土)	カメ/チョウの幼虫
8/19(金)	カナヘビ/カメ
8/20(土)	ニホンヒキガエル/カナヘビ
10/1(土)	カナヘビ/カブトムシの幼虫
10/8(土)	カブトムシの幼虫/ニホンヒキガエル
10/10(月・祝)	カメ/カブトムシの幼虫

表1 実施日および内容一覧

(1) 実施内容

内容は「生き物の話」と「生き物との触れあい体験」の2つのみにしぼり、実施した(表1)。触れあい体験で使う生き物(表2)は、主として展示用のストックとして飼育室で飼育しているものを使用した。

表2 使用生体一覧

- | | | | |
|---|-----------|-----------------|----------|
| ・エダナナフシ成虫、卵 | ・トゲナナフシ成虫 | ・ニホンヒキガエル(中・小) | ・ニホンカナヘビ |
| ・イシガメ | ・クサガメ | ・カブトムシ成虫(雌雄)、幼虫 | |
| ・チョウの幼虫、蛹(いずれもナガサキアゲハ、アゲハ、ジャコウアゲハ、クロアゲハ、キアゲハ) | | | |

(2) 実践の様子

「生き物の話」は、年代や生き物の好き嫌いに関係なく話に参加できるようにクイズ形式にしたり、専門的な言葉を使わず、簡単な言葉で伝えるように工夫した。子どもだけではなく、大人も積極的に参加していたのが印象的だった。触れあい体験の時に見てほしいポイントをクイズにするなど、短時間で生き物のことをしっかり伝えられるように考慮した。また、A3サイズのフリップを使うことで、絵や形で表現することができるため、言葉だけの時よりも子どもの注目を引きやすいたことが分かった。「触れあい体験」では、触るときの注意を必ず伝え、嫌な時には無理して触らず、観察するだけでもよいという形をとって実施した。苦手な子どももいたが、言葉がけや違う触り方を提案することで、「触れてみよう」という気持ちに変化していくこともあり、きっかけづくりは大切であると実感する場面も多くあった。家族での参加が多かったが、子どもの新しい一面を発見したり、親子で楽しむ姿を見ることができた(写真2・3)。



写真2 触れあい体験の様子①



写真3 触れあい体験の様子②

第2節 参加者アンケートの結果

実施回ごとに参加者アンケートを配布し、回収と集計を行った。1組につき一枚の配布で、回収率は100%(94枚)である。また、本研究の参加者アンケートの結果及び回収したアンケート用紙については、全職員に回覧している。

1) 参加者の年代について(表3)

当館利用者層がそのまま反映された結果

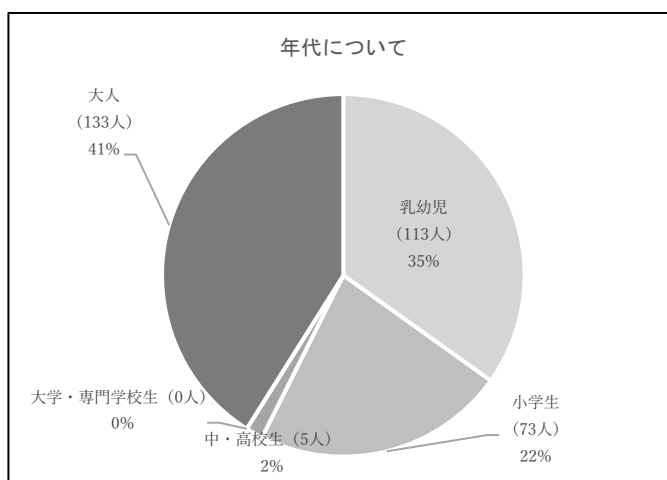


表3 参加者の年代について

となった。夏季休業期間中に7日間実施したが、小学生の参加が予想より少なく、残念ではあったが、中学生の参加があったことは嬉しかった。やはり、乳幼児を中心にしながらも、どの年代にも対応できるようにしておくことは大切であると思われる。

2) イベントを知ったきっかけについて
(表4)

来館時、特に受付の看板や5分前の館内放送で知る参加者が圧倒的に多かった。しかし、1割ほどではあるが、FB等という参加者もいることから、SNS等のツールを利用した情報発信の必要性を認識できた。

3) イベントの内容について (表5)

「もっとこうしてほしい」という意見を聞くために設けた項目であったのだが、予想外の結果となった。準備を整えたうえで、飼育を担当している生き物を使用して実施できたため、このような結果を得られたのではないかと考える。

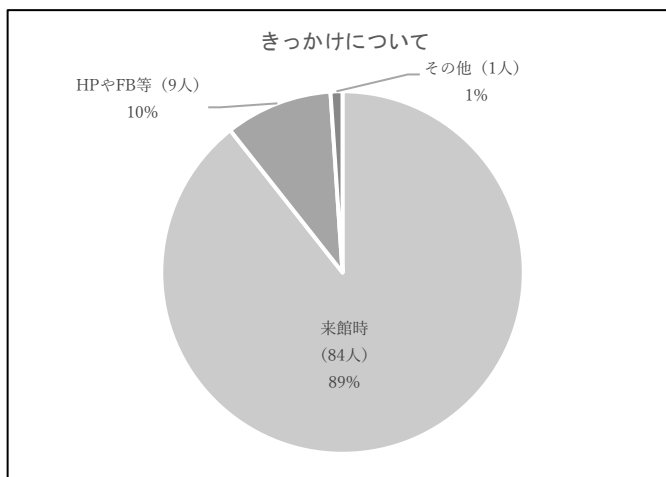


表4 イベントを知ったきっかけについて

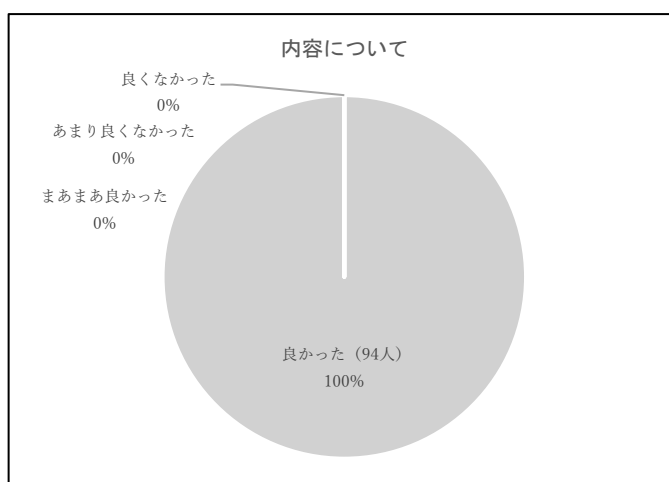


表5 イベントの内容について

4) 自由記述欄での感想や要望について

計84件の感想や要望が寄せられ、そのほとんどが、「よかった」「楽しかった」などの好意的な感想であった。ここでは、そのうちの一部を抜粋（原文まま）し、報告する。

- ・チョウの体のことが知れて驚きでした。とてもおもしろかったです。幼虫を触ってみて、少し気持ち悪く感じたけれど、ふによふによしているのが分かってよかったです。サナギが動いているのも見られてよかったです。よい学びとなりました。
- ・今まで虫に触ることができなかつたんですが、触っててびっくりしました。とてもいい経験になりました。
- ・初めての体験！！と～ってもおもしろかったです！娘がさわれることも知ってびっくり。
- ・ヒキガエルを親子で初めて見て、さわり、とても良い経験になりました。前後のあしの数もちがったり、飛べなかったり、なくのも聞こえなくてびっくりで楽しかったです。
- ・見たことない幼虫もいて、とてもよい発見になりました。実物を見て触って、子どもにとっては忘れられない記憶になったと思います。
- ・知ってるようで知らなかつたことがわかって、とても良かったです。実際にかぶと虫を育てていますが、うんちの形を気にして見てなかつたことに気がきました。

参加者アンケートの結果から、苦手意識があったとしても、触れる体験自体を楽しめなかった参加者はいなかったことがわかる。また、生き物に対する親しみは個人によってかなりの差があるが、話を聞き興味が湧いたり、触れる体験をすることで生き物に対しての見方が変化したり、新たな発見があったりといった、参加者への何らかの効果や働きかけはできたようだ。「カメにさわりたい」「魚について知りたい」などの要望や、「また来たい」「ぜひ続けて」などの声もあったことから、やはり来館者の「ふれる」体験への期待度は高いと思われる。

第3章 活動の改善と今後の展望

本研究では、全職員へのアンケートも実施した。アンケートは、実施月ごとの「講座後のアンケート」および「次年度計画立案のためのアンケート」の2種類である。

第1節 職員アンケートによる改善案

実施内容の改善と実施者（研究者本人）のスキルアップを目的とした「講座後のアンケート」では、実際に講座を見てもらった感想や改善点等を自由記述してもらった。このアンケートは、実施月ごとの講座終了後に集約した。9件の意見のうち、一部を抜粋し、改善点を述べることにする。

- ・子どもたちがより触ることができるように1、2家族で1つのグループを作って触ってもらった方が、ふれあいもしやすく、写真撮影（親が）がしやすいと思いました。
- ・子どもたちが生き物に対する恐さとかなくなって、生き物を身近に感じてくれる様子が見てとれた。小さなイベントだが、できれば継続できると良いと思う。
- ・チョウの幼虫の時に参加された親子が、話の前は触れることに抵抗があったようでしたが、その後のふれあいでは、実際に触れることができていました。触れた感触からも多くのことに気づける、よい体験だと思います。

生き物に対する抵抗感がある場合を前提にして、「押し」ポイントや安全な触り方を“楽しく”伝える話し方や構成をするよう心がけた。また、「無理して触る必要がない」ことを伝え、一人ひとりに合った距離で生き物に接することができるように声掛けをした。さらに、ふれあいに使用する生体の数を増やし、できる限り1家族に1生体が割り振れるようにしたり、動かないものも用意することで、ふれあいのバリエーションを増やす対応をとった。

このように、職員の立場から客観的に見た感想や意見をもらうことで、自分では気づけなかった来館者の反応や、配慮不足の点に気づくことができ、対応することができた。

第2節 次年度事業計画の立案

「次年度計画立案のためのアンケート」では、実施頻度や1日当たりの実施回数、実施時間帯、実施場所等について具体的な意見が得られ、実施の可否については「実施する」の意見で一致し、次年度への計画立案へと進めることができた。

立案した次年度（令和5年度）の計画は、以下の通りである。また、今年度との変更点は、（波線）部分となる。

1) 実施日（年間15日間）

① 大型連休中（2日間）、夏季休業期間中（4日間）、秋季休業期間中（1日間）、春季休業期間中（2日間）：各日午前1回・午後1回

② その他（1, 2, 6, 9, 11, 12月の土曜日に各1日ずつ）：各日午後1回

2) 時間 〈午前〉10:30~11:00 〈午後〉14:00~14:30

3) 場所 学習室（場合によっては企画展示室または実験・工作室）

4) 定員 5組（コロナの状況に応じて変動の可能性あり）

5) 担当者 技師（2名）および学習指導員（3名）

6) その他

- ・ 講座の内容については担当者が決定し、実施時間は20分程度を目安にする。
- ・ 1日2回実施の場合は、同じ内容でも可とする。
- ・ できる限り、事前に広報（FB等）をする。

まず、実施日については、大型連休と春季休業期間を新たに入れるとともに、それ以外の月にも最低1回は実施するように組み込んだ。定期的の実施し、来館者への講座の周知を図る目的である。また、実施時間は、3Dシアターの上映に重ならないように30分ずつ早めた。さらに、午前中の来館者が少ない傾向を踏まえ、通常の土曜日に実施する場合は、午後1回のみとした。会場は、スライドの使用も可能な実験・工作室を追加した。担当者は、業務係の技師と学習指導員とし、内容も各自の裁量に任せることで、負担が少なくすむように配慮した。

なお、この立案した計画は、令和4年11月の運営会議で提案し、職員の了承を得たうえで、12月時点で次年度の事業計画へ反映されている。

おわりに

本研究では、運営コンセプトに基づいた来館者の満足度向上を目的に、「ふれる」体験の充実を図る講座の実践を行った。実践を通して、「ふれる」ことにより来館者の中に楽しさや面白さ、さらには新たな発見や学びが生まれることが明確となった。また、バックヤードの生き物を活用することができる機会や職員の接客技術を磨く機会にもなった。最終的には、次年度の計画立案をすることができ、「触れて」楽しむ活動の充実に向けての第一歩を踏み出すことができた。今後は、さらなる接客技術の向上と講座の安定的な運営、来館者への周知を引き続き図っていきたい。

参考文献・参考資料リスト

- 1) 『昆虫園研究 第20巻』, 全国昆虫施設連絡協議会, 2019.3, p50-54